

# 天地

ネットワーク テーブル 469号

発行：天地シニアネットワーク：2018・4・17

|             |   |       |     |
|-------------|---|-------|-----|
| TENTĪ TODAY |   |       | 1   |
| 会員の広場       |   |       | 2   |
| 連載作品        |   |       | 2   |
| 随 想         | 天のわざ、地のほまれー地球を測れ、宇宙を測れ<br>44. モーターの仕組み  | 伊那 闊歩 | 2   |
| 随 筆         | 「1950年代の僕と街」(七)<br>「みんなで遊ぶ」「川で泳ぎ、裏山に登る」 | 臺 一郎  | 6   |
| 旅行記         | そうだ京へ行こう・古刹の花物語(42)<br>哲学の道7・「銀閣寺」      | 大竹 漢洲 | 8   |
| 講演会         | 「奈良興福寺文化講座」「新三木会」                       |       | 1 1 |
| 事務局         |   |       | 1 2 |

## TENTĪ TODAY

現在連鎖中の「1950年代の僕と街」の執筆者、臺(うてな)さんに、お目にかかったところ、高校の9年下の後輩であることが分かりました。「お手伝いしましょうか」との有難い言。天国の小作、小僕も、喜んでいるでしょう。

伊那闊歩さんの原稿が、図が多くなり、またカラフルになってきました。図が無いより分かりやすい筈と、新しいアプリを入れたようです。現代人は、最低でもこのくらいの理・数を知っていないとダメと言うのが口癖、気合が入っています。

デジタル用語、益々多く登場するようになりました。＜シンギュラリテイー＞＜フィンテック＞＜キュレーション＞＜データサイエンティスト＞＜ペアレンタルコントロール＞、日経新聞が行ったアンケート調査で最も分かりにくい用語だとのことですが、時々は見かけます。カタカナ氾濫の時代ですが、カタカナ表示は、差別用語(?)に思えます。

同年で、以前ゴルフ仲間だった佐藤さんが、大相模のメンバーでまだゴルフを続けているときき、いささか感心しています。メンバー軽視、ビジター歓迎のゴルフ場の現状、相変わらずのようですが、1本@4万5千円もするクラブを使っていると聞きビックリです。但しバッグごとの盗難が結構あるそうで、おちおち昼食もしてられないそうです。「ゴルフは紳士のスポーツ」

と言われていた時代がありました・・・

\*\*\*\*\*

## 会員の広場

\*\*\*\*\*

大谷翔平選手の鮮烈なデビュー、世界の野球ファンを驚かせました。本格的な評価は、シーズンが終わってどのくらいの成績が残せたかによるのですが、ベブルース以来と言うのは確かでしょう。現在の分業中心の野球は見ていてもあまり楽しくありません。野球界に一石を投じたことは間違いありませんので、革命的变化が起こるように秘かに期待しています。

大谷選手に似た可能性が一番あったのは、王選手。王選手は投手として甲子園で優勝しています。巨人で、荒川コーチに出会い、打者専業になりましたが、投手としての才能に限界があったのかもしれませんが、二刀流という発想は当時の野球界には存在しなかったのではないのでしょうか。

どちらにしても、大谷選手のような本格的な二刀流選手は初めてですから、野球が大きく変わるきっかけとなりそうです。

同時に、女子水泳の池江選手、卓球男子の張本選手など、従来では考えられないような若い選手が出てきました。英才教育が実っているのでしょう。しかし、コーチの手腕もさることながら、選手個人がしっかりしているのに驚かされます。大谷選手も、同様です。彼の才能を見抜いた、日本ハムの栗山監督、凄いとしか言いようがありません。コーチにも国民栄誉賞があつて良さそうです。

政界、官界、名伯楽と言われるような人は、いないのでしょうか・・・

(津田)

\*\*\*\*\*

## 連載作品

\*\*\*\*\*

天のわざ、地のほまれ

—地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

### 44. モーターの仕組み

辞書によれば、「モーター」とは蒸気機関、蒸気タービン、内燃機関、電動機など動力発生機の通称で、最近ではモーター・ショーなどによって自動車を意味する言葉として使われることも多いらしい。「発動機」は、動力を発生する機械の総称でモーターはそのなかの一種である。その中で、今回は特に「電動機」について考えることとしたい。電動機と言えば、通常は電力を力学的な回転力に変える機械であるが、その仕組みは単純なものからかなり込み入って複雑なものまで、想像以上に多様である。最近では、直線的な駆動力を得るための高性能なりニア・モーターが開発されていて、リニア・モーター・カーが世界中で実用化されている。

fig.1

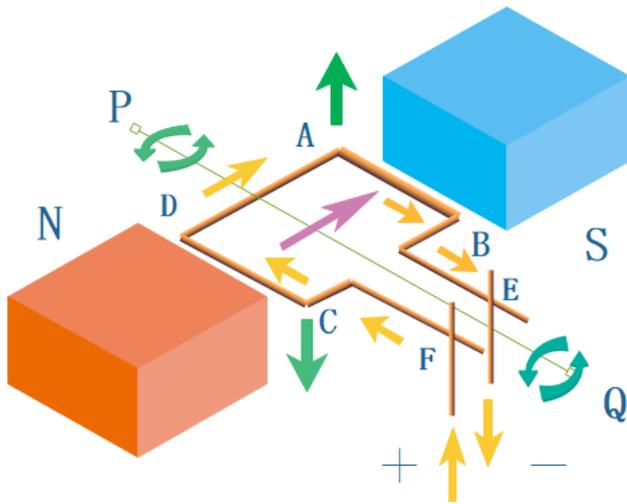


fig.1 は、ローレンツ力によるモーターの仕組みを説明するための模式図として描いてみた。磁石の N 極(赤)と S 極(青)に挟まれて、中心軸 P,Q の周りに回転できるようにローター(黄土色の四角い枠)がセットされている。ローターは点 E,F でブラシ(黄土色の縦棒)に接している。電池から供給される電流(黄色矢印、この電流は直流)は、ブラシ F を通過し、ローターの点 F→C→D→A→B を経て E からブラシの外にでて電池にかえって行く。ローターは、ブラシ E,F に固定されているのではなく接触しているだけなので、自由に回転できるのだ。磁力線は N から S に向かって紫色の矢印で示されている。この時、ローターの枠 AB は、**フレミングの左手の法則**(人差し指=磁力線の向き、中指=電流の向き、受ける力=親指)にしたがって、上向きの力(ローレンツ力=上向きの緑色矢印)を受ける。一方、CD は下向きの力(下向き緑色矢印)を受ける( DA,BC の受ける力はゼロである)。両方あわせてローターは中心軸のまわりに回転する。途中でブラシから離れるので電流が切れるが、ローターは慣性で回転し、AB は DC へ、DC は AB の位置に来る。そこでローターはブラシに触れるので再び通電されるが、ローターの電流の向きが逆になることに注意されたい。つまり、ローターが回転しても、電流は常に図に示された矢印の向きに流れるようになっている。それがブラシの役割なのだ。実際には、ローターとブラシの間に「整流子」などを挟んで、できるだけ通電時間を長くしている。こうして、モーターは回り続けるのだ

( OK ? )。

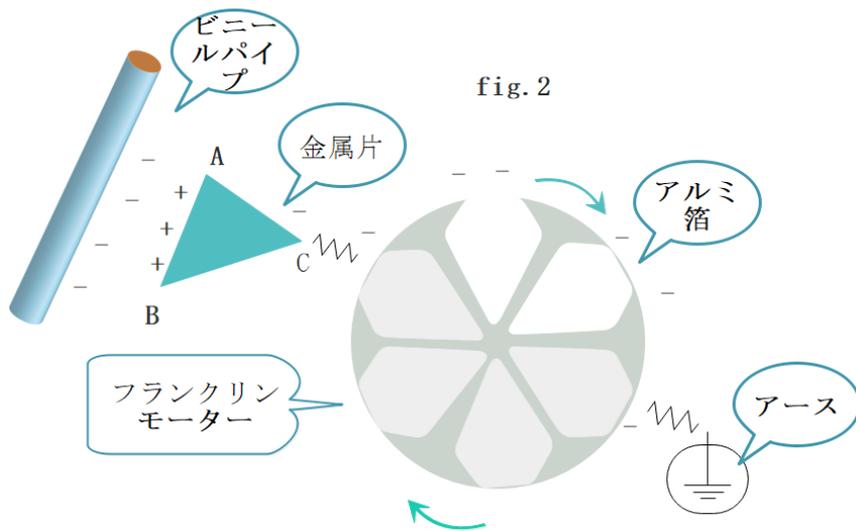
通常は外の磁石の部分(ステーターという)やローターは鉄芯に銅線をコイル状に巻き付けた電磁石を使う。ローターを3極のコイルにして、より強力でスムーズに回転するようにし、さらに直流ではなく交流の周波数に同期させて、交流でも使えるモーターが作られている。ステーターとして強力なネオジム磁石を用いて小型化し、用途にしたがっていろいろな改良がなされ、現代の車には多くの(数十個!)小型モーターが組み込まれているのだ。

アメリカ独立戦争で大きな役割を果たした政治家ベンジャミン・フランクリン(1706-1790)は、雷雨の最中に凧をあげ、検電器(ライデン瓶)を使って雷雲が帯電していることを証明して見せたことでも有名であるが、かれは静電気によるモーターをも発明していたのだ。それをフランクリン・モーターと呼んでいて、その仕組みは **fig.2** のようになっている。

**fig.2** は全体として出来の悪い現代アートのように見えるが、各部品にはそれなりの役割がある。

ビニールパイプは、これを布などで摩擦して静電気を起こし、今の場合マイナスに帯電させている。これを三角形の金属片(緑色)に近づけるとその中の電子は逃げて尖った先端Cに集まる。結果としてABはプラスに帯電する。Cに集まった過剰な電子は、放電(ギザギザ模様、コロナ放電という)を起こし、モーター本体(円形の花柄)に移動する。モーターは円形のプラスチック板にアルミ箔(花びらの6枚)を貼りつけたもので、中心が固定されてクルクル回るように作られている。電子はこのアルミ箔に飛び移ってマイナスに帯電させる。その結果、アルミ箔とCとの間に反発力(クーロン力)が生じ、プラスチック板を回転させることになる。

ただし、初期条件によってどちら向きに回るかモーターの気分次第(?)である。マイナスに帯電したアルミ箔が反対側にまわってきたとき、また放電(ギザギザ模様)が起こってアルミ箔にたまった電子はアースされて地球に吸収されてしまう。このプロセスを繰り返すのだ。放電は常に起こっている(そのために、ビニールパイプを摩擦してセッセと充電しなければならない)。クーロン力によってモーターは回りつづける。

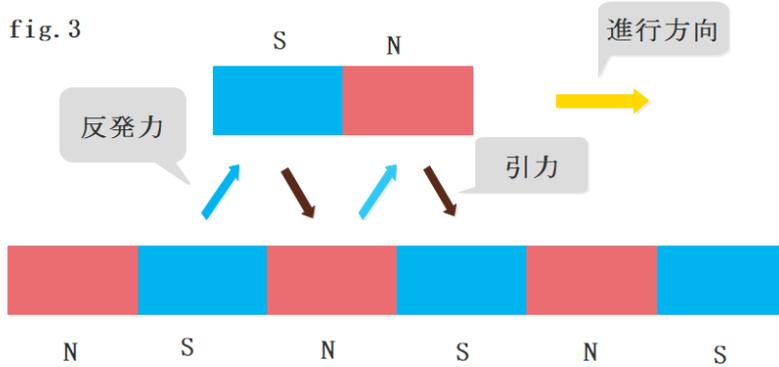


電磁気の働きについて、文章で説明すると何か複雑に思えるが、あらためてフランクリン・モーターの仕組みを眺めてみると、その原理（静電気による反発力＝クーロン力）もモーターの構造（クーロン力を回転力に変える）も簡単であることがわかる。ただし、これにはビニールパイプやアルミ箔など現代の製品をつかっている。当時としては、これらに相当する材料を集めるだけでもたいへんであり、忙しい政務の最中、こうしてモーターを作ることができるということを思いつくフランクリンは、非凡な(理系の)才能の持ち主でもあったと思われる。

フランクリン・モーターの駆動力は微弱な静電気力である。パワーも微弱である。図からわかるとおり、薄い平らなモーターとして製品化することができるので（充電方法としてビニールパイプではない工夫を要するが）、最近では、ノート・パソコンやケータイ、スマホなど厚さのない、しかもパワーを必要としない電気製品の中に、MEMS（マイクロ・エレクトリック・メカニカル・システム＝メムス）として実用化されて組み込まれているという。ちなみに、静電モーター（鞭毛）を備えている細菌が発見されている。かれらはフランクリンの発明など知る由もないが、いとも簡単に鞭毛モーターをタンパク質から作り出しているのだ。かれらは、自然界に生ずる静電気をたくみに利用してミクロな車輪さえも自作しているという。

電力を回転力ではなく、直線駆動力に変換するのが、リニア・モーターである。特に、2027年に品川一名古屋間に開通するというリニア新幹線は超電導リニア・モーターが使われ、車体は宙に浮いて走るので、航空機と同程度のスピード（時速600kmを超えた！）がでるとあって話題になっている。日本では、すでに地下鉄大江戸線や横浜グリーンラインなどにリニア・モーター・カーが走行している。これらには車輪がついているので、リニア・モーターはもっぱら駆動力として使われる。その仕組みを模式的に描いたものがfig.3である。（図はWikipedia：Personal Notebook of Petit Science, 雑科学ノートモーターの話から拝借させていただいた）

fig. 3



図の赤と青のブロックは、それぞれ電磁石で赤はN極、青はS極である。上段は車両に取り付けられている電磁石、下段はNとSを交互につないだレールの部分であるが、レールの電磁石は車両の固定磁石の極性に同期して、素早くNとSを入れ替えられるようになっている。つまり、車両のNが通過する前にレールのブロックはSにきりかわっており、車両を引き付ける。車両のNが通過するときには、レールのブロックをNに切り替え反撥力を生じさせる。こうして前方への駆動力をつくりだす。

ただし、このままでは車両はレール上に落下するので、リニア新幹線は車両を吊り上げ宙に浮かせる磁石が側壁に沿って設置されている。そこに強力な超電導磁石を用いるので話題になったのだ。大江戸線は、車両を車輪で支えるので、磁石の力はもっぱら駆動力として用いられている。超電導磁石については、後の回において考えたい。

(この項おわり)

\*\*\*\*\*

随筆風「1950年代の僕と街」(七) 臺 一郎

みんなで遊ぶ

昭和20年代の前半に生まれた僕達の世代は、小学生や中学生の頃に何をして遊んだか、今の子供達と何が違うのか、違いや特徴を考えてみた。

一つ目は100%アナログ系の遊具や玩具で遊んだという点。これは遊具・玩具に限らない。家電製品も乗り物も電話もカメラもすべてがアナログ技術の製品だった。そもそも当時の世の中には、デジタルとかアナログという言葉さえなかった。現在の生活がデジタル技術に大きく依存しているのとは全く違う。

二つ目は、一人で遊ぶものは漫画や本などに限られ、遊びの大半が最低でも二人以上でやるものだったという点だ。ベビーブームで子供の数がやたらと多かったからかもしれない。野球、馬跳び、缶けり、かくれんぼ、ダルマさんが転んだ、チャンバラ、相撲、ドッジボールなどいずれも数人やグループで遊んだ。対して、今の子供達は、スマホやパッドなどにゲームソフトや

アニメソフトをダウンロードして一人で遊ぶことが少なくない。ゲーム機なども小型の一人用が主流だ。で、中学生になると音楽も自分専用の端末やスマホに好きな楽曲をダウンロードして聴いている子が多い。子供の数が減ったうえに、子供部屋の個室化が進み、おまけに夏は猛暑日やゲリラ豪雨の日が増えたために、エアコンの効いた自室で一人遊びをする機会が増えたのかもしれない。

そして三つ目。1950年代の子供達は玩具や遊び道具をしばしば自分で作った。しかもこうした玩具作りや道具作りは、それ自体に子供達を夢中にさせる要素が確かにあった。20世紀の後半、日本がものづくり大国になった背景には、団塊世代などが、子供の頃から自分で玩具や遊び道具を手作りしたという経験が背景要因としてあるのかもしれない。

自作の玩具・道具類の例を挙げてみよう。竹を小刀などで削って作る竹とんぼ、木の糸巻きに刻みを入れて割り箸と輪ゴムを動力装置にした戦車、割り箸を輪ゴムや紐で縛って組みつけて輪ゴムを玉代わりに飛ばすゴム銃、チャンバラ用に木の枝を削って作る木刀、鉛筆の金属キャップに火薬やセルロイドを詰めた手製ロケット、彫刻刀と板で作る版画彫りなどだ。今の子供達は鉛筆を削る時でさえ、親は安全を考えてナイフは使わせない。

さて、以下では子供の頃の遊びを具体的に思い出してみる。

まずは室内の遊び。すぐに思いつくのはゲーム系の遊びだ。昔からのものでは将棋がある。これは基本的に大人の遊びなので、ルールが複雑で技も奥が深い。小学生だと高学年からの遊びだった。ちなみに僕は出来ない。僕がやったのは軍人将棋。ルールが単純で覚えやすく、技も殆どないからだ。僕以外でも多くの男の子がやった。その他のゲーム類ではトランプとかコピットゲームとかダイヤモンドゲームといったゲーム類だ。

ゲーム系以外の室内遊戯としては、三年生くらいまではゼンマイで動くブリキの自動車や電車で遊んだ。高学年になると電池とモーターで動く自動車や電車などで遊んだし、部屋の中にOゲージのレールをいくつも繋いで模型電車を走らせて遊んだりもした。

小学校の低学年の頃はまだテレビが無かったら、漫画や子供向け小説などもよく読んだ。漫画は月刊の「おもしろブック」、「少年」、「冒険王」などの漫画雑誌もよく読んだ。これらの雑誌は、本冊のほかに各種付録が付いていて、それも楽しみだった。お正月号などは付録の量が半端でなく、バラけないように本冊と付録が紐で縛られていた。付録の中にはボール紙で組み立てる幻灯機とか、張り穴写真機とか、大阪城だとか、模型飛行機などの立体付録もあって、これがまた大きな楽しみであった。

そのほかでは、男の子だから鉱石ラジオの組み立てなども良くやった。ハンダゴテなどを使って電線や部品を接続し、イヤホンに耳を当てると本当にラジオ放送が聴こえてきてなんとも嬉しかった。6年生頃になると、プラモデルの軍艦や潜水艦の組み立てキットなどが売られるようになり、たまに買ってもらった。潜水艦などは風呂場の浴槽で、実物と同様に船体に注水して水中に沈めて楽しんだ。改めて考えてみると、鉱石ラジオやプラモデル潜水艦などの組み立て玩具は、結構教育的要素もあったような気がする。

川で泳ぎ、裏山に登る

子供の頃の屋外での遊びについて書く。

僕の場合、特に印象が深いのは、九州の苧田町や北海道小樽市にいた頃の  
外遊びである。なぜか。理由の一つはともかく自然が豊富だったから。昭和  
30年台初頭の苧田町は東京の杉並区などと比べて、もう断然田舎だった。お  
そらく第二次大戦前の杉並区でも、昭和30年頃の苧田町よりは都市化して  
いたと思う。その代わりに、当時の苧田には東京の区部などでは到底望みえ  
ないような豊かな自然があった。海もあったし、山もあったし、子供が遊べ  
る川も身近にあった。純粹な自然ではないけれど田んぼや畑などの農地や樹  
林などもふんだんにあった。家の近くの日豊線を蒸気機関車に引かれた客車  
が通ると、子供達はしばしばまるで子犬が尻尾を振るように、懸命に手を振  
って車窓の乗客とつかの間のコミュニケーションを楽しんだ。遊びではない  
けれど、天の川や北極星や星座のことを自分の目で確認しながら知ったのは、  
満天の星が輝く苧田の夜空が教材だった。また子供達にとって里に接するな  
だらかな山は、『さあ登山するぞ』と構えて登る山ではなく、普段の遊びの延  
長で気軽に入って行ける山だった。

一方北海道の真冬の小樽市はまさに雪国そのもの。冬になると毎年2回位  
は猛吹雪で学校が休みになった。長さが1m以上にもなるツララの味を知っ  
たのも小樽だった。スキーもスケートもソリ遊びも思う存分、目一杯やった。  
もし東京に居て、小樽で5年間やっただと同じ回数 of スキーをやろうとしたら  
20年間位は必要だったろう。降りしきる雪の中で懸命に馬ソリを引く馬  
の様子は、湯気のように噴出す鼻息も含めて、昭和20年代の小樽で暮らした  
からこそ知ることや見ることが出来た貴重な状景だった。

さて印象深い理由の第二は、遊ぶための道具づくりという点で当時の苧田  
町や小樽市はとても恵まれていたからだ。苧田町などは自治体も住民も裕福  
ではなく、殆どの子供達は、都会の子供が親や祖父母から買ってもらうよう  
な玩具や運動用具を持っていなかった。それでも子供達は遊びに全く不自由  
しなかった。身近にある大人の道具や生活用具類を工夫して遊びに使いこな  
していたし、いたるところに自生している木や竹を材料として使い、自分で  
加工して遊具を作ったからだ。

以下に苧田での外遊びについて書く。

前にも書いたが苧田町の家は裏に小さな川が流れていた。夏になれば僕は  
友達とその川で、殆ど素っ裸になって水遊びをした。川の石を組み合わせて  
ダムもどきのものを造ったり、流れの淀んでいるところでバタ足の練習など  
もした。ほぼ素っ裸だから、水着の跡もなく文字通り全身真っ黒に日焼けし  
た。また家から1キロちょっと歩くと、今は埋め立てられてしまった遠浅の  
海浜があり、そこで潮干狩りなどもした。地元の漁船に乗せてもらって定置  
網の引き上げを体験することもできた。海と反対側にやはり1キロちょっと  
行くと、里山や裏山に行き着く。そこから山道を登っていくと、グミの木な  
どが自生していて、実をむしりにとって食べた。今でも目を閉じて意識を集中  
すると、グミの実のあの甘酸っぱい味が記憶として蘇る。山の中には野いち  
ごの群生地もあって、持参した袋一杯にイチゴを摘み、家に持ち帰って母に  
ジャムにしてももらったりした。

苧田町は竹林が至るところにあったから、遊具作りの材料として竹には事  
欠かなかった。竹を切ったり、削ったりして、竹馬、竹とんぼ、水鉄砲など  
を作って遊んだ。こうした遊具製作はそれ自体やっけていて夢中になるため、

とても楽しかった。一番沢山作ったのは竹とんぼ。羽根の幅やら厚みやらヒネリの角などを微妙に変えて、一番跳ぶ翼形状を見つれたりして遊んだ。こうした竹トンボ作りなどでは、肥後の守などの折りたたみナイフや小刀や錐を使った。今なら小学校低学年の子供が、こうした刃物で竹や木を削ることは大変危険という理由でたどところに禁止されるし、文房具店も小さい子供には売らないだろう。

そういう意味では、現在と比べて経済的には貧しくとも、大人達ものんびりと鷹揚な時代だったと思う。また、子供達にとって、少々の経済的な貧しさや不自由は遊びの障害とはならず、むしろ創造性や工夫を育み発揮する環境となったのかもしれない。

\*\*\*\*\*

## <そうだ京へ行こう・古刹の花物語> (42)

大竹漢洲

### 哲学の道・銀閣寺

両岸に桜並の続き、桜樹が水面に写す「白川疏水分流」の・流れに、小橋の上で別れを告げて、右手に銀閣寺参道に一步踏むこむと、世俗的な匂いと喧騒が満ちてきました。今までの静寂且つ清楚な世界が嘘のようです。外国人の姿が目立ちます。日本文化を真剣に学んでいる学生は態度が違います。始末の悪いのが、金の力で観光旅行をしている連中です。道の真ん中でVサインで集団で写真撮影をしたり、ソフトクリームやたこ焼きを食べながら歩く東南アジア人の姿が多くなったことです。最近、奈良や京都の観光地で修学旅行の学生たち（物論日本です）に出会う機会がありますが、規律があり真面目に学ぶ姿勢が伺えます。学生たちの眼に、外国観光客の姿が何の様に写っているのでしょうか？。益々韓国や中国が嫌いになってしまうのが心配です。6月に奈良・京都に修学旅行に行く孫に感想を聞いてみたいものです。観光客の往来で混雑している銀閣寺参道を上り詰めると銀閣寺の山門に至ります。山門を駆け足気味に通り過ぎがちですが、山門に立ち止まって正面を見上げると、月待山の緑に美しさを感じます。日本人の美意識は独特で、自然が“かたち作る”風土の中に美を発見して、人工的な“かたち”と融合させて更に美しさを追求しています。余談ですが『琳派』の美意識です。美しい山容の月待山の存在がなければ、銀閣寺も存在していなかったであろう。

山門の狭い参道でも、熟むに撮影している“飽きない”一団がおります。人混みを避けるようにして門を過ぎると人々の声は聞こえなくなり、静寂な空間に変わっています。門一つが俗と浄との結界です。今までの騒がしかった邪鬼が一瞬にして消え去ったようです。入口まで長い入道があります。旅人は日本人の持つ美意識をここでも感じます。銀閣寺の境内よりも好きな処かも知れませんが。入道の両側には10m程の高さの垣根があり外内を仕切っています。外の世界の喧騒を完全に遮っています。高い垣は下は石積、その上が竹、その上には刈り込まれた灌木が整然と続いています。訪れる人々に期待感を与えてくれます。基本的なことですが、創

建当初は「銀閣寺」は寺ではありませんでした。足利将軍の隠居所でした。銀閣寺が何故に隠居所でなければならなかったのか?。足利将軍であった義政の政治的な立場と、義政が造営した銀閣寺の果たした文化的な役割を知ることが必要です。思わぬ結果を招いたのは、11年にも及ぶ大乱「応仁の乱」であったことは言うまでもありません。

余談です。時とともに培われた平安京の皇族・藤原貴族の公家文化、平一門の武家文化、寺社仏閣の仏教文化が悉く焼滅した大乱が「応仁の乱」でした。銀閣寺を中心とした「東山文化」は、大乱以後に生まれた新しい文化です。逆説的には日本文化が、今日まで継承してきた「東山文化」は、正に「応仁の乱」の招いた結果です。考え方で結果は如何様にも変わります。

余談の余談です。中学校の歴史で学んだ「応仁の乱」を簡単に説明します。忘れたでしょう? 応仁元年、足利将軍及び管領畠山・斯波両家の相続問題を切っ掛けとして、東軍細川勝元と西軍山名宗全とが、それぞれ諸国大名を引き入れて対抗した大乱です。この大乱から長い戦国時代が始まったと言っても過言ではありません。大乱は文明9年まで11年間も続き、正しくは「応仁・文明の乱」です。

将軍家相続問題の張本人である義政は室町幕府第8代将軍でしたが、継嗣に恵まれません。弟義視を養子として次期将軍候補としましたが、生まれないと信じていた妻日野富子に義尚が生まれるに及んで、養子義視を疎んじ出したことが因となり、将軍家は二分して対立構造に発展していきましました。最初は将軍義政を中心とした東軍は実子・義尚と、西軍は養子義視との将軍家継嗣問題の構図でした。しかし政治的な能力の無い義政が将軍職にあったことで、継嗣問題は解決するどころか、一層複雑になります。何と東軍は将軍義政・義尚を、西軍は義視を将軍職に就けて、二つの幕府が成立することになりました。その後は、管領も巻き込んで対立構造は益々、深刻化して、京都を中心に東軍は“花の御所”に、西軍は堀川西岸(西陣)に陣を構えて京の洛中、洛外の社寺が戦の場と化したため、洛中と言わず洛外の寺社仏閣は悉く炎上して、火災を免れた大寺院は洛中では東寺、嵯峨野では天龍寺・大覚寺のみでした。この大乱は地方にも波及して終焉どころか、拡大の一途を辿りました。

余談の余談です。歴史上の無意味な三大戦争は「応仁・文明の乱」「戊辰戦争」「第二次大戦」です。京都は二度の戦いの被害を被り、灰燼に帰しましたが、不死鳥のごとく再生しています。神仏は庶民の生命を護ってくれませんでした。庶民の不屈な力でした。この大乱が何時終局を迎えるか? 将軍義政には期待を持ってません。誰にも問題解決の見当がつかいません。解決の糸口が突然見えてきました。文明5年(1473年)。大乱の主であった守護職の山名宗全と細川勝元が相次いでこの世を去りました。この機会に義政は将軍職を義尚に譲り、第9代の足利将軍に就きました。厭世的な雰囲気蔓延して、長く続いた大乱も終局への道を辿っていきましました。

地に堕ちた幕府が天下静謐の祝賀を催して、文明9年(1477年)に11年続いた「応仁・文明の乱」は終止符を打ちました。足利義政は将軍としては、X将軍でしたが、文化人としての感性は超一流でした。大乱に厭世を感じると、即座に将軍職を義尚に譲ると一大洗意をしました。世俗界と絶縁して、晩年は学問と芸術に没頭して生きることを志したのです。静謐な晩年を送るため、義政が選んだ舞台は、弟義視が住持していた浄土寺の跡地でした。この浄土寺も「応仁の乱」の戦火をあびて荒廃していました。この地に義政が建てた隠居所「常御所」、又の名は「東山山荘」は、竜骨橋の架けられた池水を中心に回遊式庭園を作り、西指庵・超然亭・浴室・持仏堂(東求堂)・画指の門・会所・泉殿・舟舎の数多くの建物が配置されていきました。最後に建築された「観音殿」が「銀閣寺」です。わざわざ、総ての建物を書き出した旅人の意図は、義政は寺院ではなく、この地に本気で隠居所の建築を考えていたことを知って貰いたかったからです。義政は俗界に未練を持っていました。義政は一度も僧侶に成ることを意思表示したことはありません。西指庵と命名した建物は、恰も西方浄土を憧れている解脱者のようですが、持仏堂には「東求堂」と名ずけて「東」を強調して、恰も俗界に生きていることを主張しているようです。しかし、更に穿った見方をすれば、義政・義尚は東軍にありました。「東求堂」は“仏に東軍の勝利を求めて”勝ちを得たお礼に対する持仏堂ではなかったのでしょうか? 余談です。「東山山荘」建設は、最後に観音殿(銀閣寺)の上棟式が行われました。翌年に義政は、中風の発作を起こして亡くなっています。臨終の折に義政は仏に救いを願って義満の「鹿苑寺(北山殿)」に倣って寺院にすることを言い残しています。観音殿は「銀閣寺」に変わりました。正式な寺号は、義政の院号に因んで「東山慈照寺」です

(この項つづく)

\*\*\*\*\*

## 文化講座・講演会

\*\*\*\*\*

### 奈良興福寺文化講座 2018年5月17日(木曜日)

午後5時半～6時半：第一講「興福寺中金堂からみた奈良時代の建築」

奈良文化財研究所・都城発掘調査部・遺跡研究室研究員 海野 聡

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：(学)文化学園 文化服装学院内

受講料：500円 先着200名

(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分)

\*\*\*\*\*

## 第94回 新三木会講演会のご案内

1、日時・会場 2018年5月17日(木)13:00-15:00 如水会館

2 『どうなるか、トランプ政権と朝鮮半島情勢』

春名幹男 元共同通信ワシントン支局長

3. 申込・会費 E/Mail: [shinsanmokukai@gmail.com](mailto:shinsanmokukai@gmail.com)

Tel :047-464-4063

フルネーム:一般・天地シニアネットワーク

会費:2000円 婦人1000円 学生無料

茶話会:15:15-14:20 千円(自由参加)

4. ホームページ

<http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

5. 予告

6月21日(木)第95回 沖村憲樹氏 元科学技術振興機構 理事長  
『日中の科学技術開発について』

7月19日(木)第96回 松尾文男氏 ジャーナリスト  
元共同通信社常務取締役  
『アメリカと中国の長い歴史』

以上

\*\*\*\*\*

## 事務局

\*\*\*\*\*

<事務所移転しました。新住所は下記にあります。>

<投稿歓迎><図書の推薦依頼>

<プリント版・郵送>

メール版(無料)を月に一回編集してプリント版を発行郵送しています。お申込みくだされば送ります。その際には、実費として1月350円(4200円/年)をいただいておりますのでよろしくお願い申し上げます。

<振込先>振込先:三井住友銀行「神田支店」(普通)7871532  
(口座名) テンチシニアネットワーク

---

天地シニアネットワーク・テーブル・469号

発行：2018年4月17日

天地シニアネットワーク事務局（津田 孚人）

新住所：〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：[tentisenior06@gmail.com](mailto:tentisenior06@gmail.com)

電話・FAX・03-3819-7651

携帯電話(津田)：090-2534-1316